

## 巻頭言

レビー小体型認知症の発見

～小阪憲司先生の偉業とこれからの日本認知症予防学会が進むべき道とは～



日本認知症予防学会 理事  
医療法人社団彰耀会 メモリーケアクリニック湘南 院長  
内門 大丈

2023年11月4日(土)、第17回レビー小体型認知症研究会が開催されました。メインシンポジウムのテーマは、「小阪憲司先生追悼記念学術講演～DLBの発見、現在、過去、未来～」であり、研究会の代表世話人の池田学先生をはじめ、小阪先生にご縁のある著明な先生たちにご登壇いただきました。

1976年、小阪憲司先生はDLB (Dementia with Lewy Bodies) の研究において画期的な剖検報告を行い、その後国際的なDLBの研究を牽引しました。1995年には、英国で開催された第1回DLB国際ワークショップに参加し、1996年のDLBの診断基準の確立にも重要な役割を果たしました。2006年には、小阪先生主催による第4回DLB/PDD国際ワークショップが横浜で開催されました。これを契機に日本がDLBの研究における一大拠点として世界的に認められ、国内における臨床的・基礎的研究の機運が高まりました。また、2014年にドネベジルが、DLBの認知症症状の進行抑制に関して保険適用の対象となり、2017年に診断基準が改定されてからは、臨床医にとってDLBの診断と治療が身近なものとなりました。小阪先生の研究から臨床までの幅広い活躍は誰もが認めるものとなりました。

2007年11月、小阪先生はDLB研究会を設立し、2008年には、第1回レビー小体型認知症家族を支える会を開催、その翌年には、DLB研究会と同時に開催されるようになりました。2015年からはDLBサポートネットワーク (DLBSN) と名称を変更し、全国の各支部の自主的な運営を尊重する形で今日まで継続しています。現在、DLBSNは、2022年3月時点で全国20か所のエリアが独立して地域に根差した活動を展開する非営利組織として存在しています。

小阪憲司先生の偉業は、認知症の分野の先生であればだれもが知るところではありますが、多職種連携の重要性がいわれるずいぶん前から、チーム医療の重要性を強調しておられました。日本認知症予防学会は、「認知症予防」(一次予防から三次予防まで) を主軸に置いた認知症関連学会ではありますが、早期診断、早期介入を考えた際には、このチーム医療が大事なのは言うまでもありません。2023年6月14日に、「共生社会の実現を推進するための認知症基本法」が参議院本会議で可決・成立しました。この中の基本理念の6番目には、「共生社会の実現に資する研究等を

推進するとともに、認知症及び軽度の認知機能の障害に係る予防、診断及び治療並びにリハビリテーション及び介護方法、認知症の人が尊厳を保持しつつ希望を持って暮らすための社会参加の在り方及び認知症の人が他の人々と支え合いながら共生することができる社会環境の整備その他の事項に関する科学的知見に基づく研究等の成果を広く国民が享受できる環境を整備。」ということが書かれています。DLBにおいては、prodromalDLBという捉え方が知られるようになってきており、早期発見をすることで予後が違ってくる疾患です。私ごとになってしまいますが、2023年12月には、「レビー小体型認知症とは何か 患者と医師が語りつくしてわかったこと」（著書：樋口直美・内門大丈）（ちくま新書）という書籍が上梓されます。この書籍は、レビー小体病の当事者である樋口直美さんとの対談本であり、認知症の理解と対応に新たな視点を提供するでしょう。日本認知症予防学会は、当事者と共に課題に立ち向かい、解決策を共同で模索していく姿勢がますます重要であると確信しています。認知症の予防と対応においては、医療・介護の分野だけでなく、患者や家族、地域社会との連携が欠かせないことを肝に銘じ、多様な専門性を持つ人々が協力し合うことで、より良い未来が築かれることを期待しています。